

資料

## ASD 児の母親が経験した専門職者に対する 怒りや傷つきの分析 —インタビュー手法を用いた予備調査から—

小田桐早苗\*<sup>1</sup> 北川裕美子\*<sup>2</sup> 吉田浩子\*<sup>3</sup>

### 要 約

本研究は、既に成人している知的障害を伴う ASD (Autism Spectrum Disorder: 以下, ASD とする) 者の母親を対象に、過去を振り返り支援者との関りから感じた怒りや傷つき体験についての語りを分析し、支援者の言動と親の受け止めについて検討を行うこと目的とした。インタビュー調査の結果では、研究参加者3名のうち2名が、特別支援学校の教員および福祉サービスにおける支援者とのやりとりの中での怒りや傷つき体験のエピソードを語っていた。親が怒りや傷つき体験と感じた背景には、①怒りや傷つき体験の前場面として「我が子が適切な行動を取ることができずにいる状況を共有する」プロセスがあった点、②支援者と親がその出来事について共に話し合う場面で、親と支援者間における子どもの行動背景の捉え方の違いを親が感じている点、③支援者にはこうあってほしいという期待を親が持っており、支援者の言動が期待と異なる点が挙げられた。上記のような親と支援者間の違いは、子どもの困難場面について共有し、出来事の課題解決へ向けて話し合う場面であるにも関わらず、親に怒りや傷つきをもたらしていた。さらに、ライフステージを越えて同様の体験をしており、繰り返される怒りや傷つきは、親が支援者に期待することを諦めるという表現につながっていた。このことは、困難場面の解決へ向けて、親と支援者が同じ方向を向いて進むためにも、支援者自身が親の視点や思いに目を向けることの重要性を示しているといえる。

### 1. 緒言

#### 1.1 研究の背景

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: 以下, ASD とする) は、様々な遺伝的要因が複雑に関与する脳機能障害とされている<sup>1)</sup>。2013年5月アメリカ精神医学会により、精神疾患の診断統計マニュアル第5版 (DSM-5: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition) の中で ASD の新しい診断基準が公表された<sup>2)</sup>。さらに2018年に国際疾病分類 ICD-11 (International Classification of Diseases 11th Revision) が公表された<sup>3)</sup>。これにより、ASD の症状は①社会コミュニケーションと社会的相互作用の持続的な障害、②行動・関心・活動における固定的・反復的なパターン

にまとめられた。このような ASD の診断基準の変化の背景には、ASD の特性をもちながら、診断につながらず必要なサービス利用を受けることができなかった人たちの存在が明らかとなり、ASD 特性のある者の幅広さが示されたことがある。国内においても、平成24年文部科学省の「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」は、ASD を含めた発達障害の特性をもつ児童生徒の通常学級の中における潜在的な存在の可能性を示唆した<sup>4)</sup>。同調査結果によると、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は6.5%であった。該当する児童生徒への支援の状況については、「現在・過去において支援が

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

\*2 四国学院大学 社会福祉学部

\*3 人間総合科学大学大学院

(連絡先) 小田桐早苗 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail: sawada.s@mw.kawasaki-m.ac.jp

なされている」は58.2%,「過去も現在もいずれの支援もなされていないまたは不明」が41.7%という結果となっていた。また、アメリカ疾病予防センター (Centers for Disease Control and Prevention : CDC) の調査において、8歳の子供1,000人あたり18.5 (54人に1人) との報告もあり、ASD 者の数の増加が示唆されている<sup>5)</sup>。

このような ASD 者をとりまく状況は、医療・教育・福祉においても重要なトピックであり、当事者や家族の医療・教育・福祉的ニーズの高まりへ応えることが求められる。近年、地域包括ケアシステムの構築のもと、住み慣れた地域で最期まで暮らせるよう、ライフステージを通じて切れ目のない支援の重要性が指摘され、地域の実情に即した支援のあり方が検討されている。障害者が積極的に社会参加・貢献できる共生社会の実現は、分野を超え様々な取り組みとなっている。ASD 者の支援においても、幼児期から老年期までのライフステージを超え一貫した支援に基づいた地域生活の提供のためには、本人、家族、支援関係者の協働を欠くことはできない。このような関係において、親は子どもの幼児期、児童期においては医療・教育・福祉における本人の代弁者でもあり、教育機関における特別支援学級か通常学級の選択、支援者と親の関係性の重要性は、多くの先行研究でも示されるところである<sup>6,9)</sup>。先行研究においては、家族支援というキーワードを軸に研究が進められており、親の心理的側面に関する研究<sup>10)</sup>や支援機関の役割に関する研究<sup>11)</sup>など多岐にわたる。ASD 者自身が、医療・教育・福祉と関わる時、親もまた支援者と何らかの関わりをもつ可能性は高く、親への支援の重要性が示されているといえる。ASD 者の支援においては、障害特性理解に基づく支援の重要性が指摘されて久しく、その支援の在り方如何では ASD 者自身が、不適応状態に苦しんだり、二次障害により医療機関を受診したりするケースが増加している<sup>11)</sup>。このような特性理解に基づく支援・関わり的重要性については、福祉サービス支援上のみならず本人への関わりとして重要な視点であり、家族の本人理解を支援する上でも重要であるといえる。親のわが子への特性理解を支援する際に、日々子どもへの療育やサービス提供を行っている事業所、医療機関、教育機関の専門職は重要な役割を果たせると考える。しかし、ASD 者の親が、わが子が福祉サービス等を利用する中で、どのような支援者の説明や働きかけがわが子の特性理解につながったと感じているかについての研究は少なく、その実際については検討が必要な状況であるといえる。支援者と親が、ASD 者自身の支援におい

て同じ方向を向くためには、共通の特性理解とその共有を可能とする支援者と親の関係性が重要であると考えられる。そこで、本研究では既に成人している知的障害を伴う ASD 者の母親を対象に、インタビュー調査を実施し、医療・教育・福祉機関をわが子が活用する中で、支援者との関係における親の体験について抽出し、支援者に期待される態度や視点を検討することとした。先に述べた通り、医療・教育・福祉に携わる支援者等は、親のわが子に対する障害特性理解への重要な役割を担うことができるのではないかと考える。その土台となるものは、支援者と親との関係性であり、支援者は親との関係形成への働きかけについて十分留意する必要がある。

## 1.2 研究の目的

本研究では、成人期の ASD 者の親にそれまでの支援者等との関わりの中での親と支援者の関係における肯定的体験、怒りや傷つきの体験を問うことにより、支援者の言動と親の受け止めの関係について検討することを研究全体の目的とした。本報告では、怒りや傷つき体験についての検討及び報告を行うものとする。特に支援者のどのような働きかけが、怒りや傷つき体験として残るのかを検討することは重要であると考え、支援者の言動と親の受け止めの関係について検討することを目的とした。

## 2. 方法

### 2.1 研究参加者

幼児期から成人期の特別支援教育の対象となる子どもを養育している親の会に所属、活動している知的障害を伴う ASD 者の母親に協力を依頼した。

### 2.2 データ収集方法

調査対象選定については、Z 県内の ASD 者の親が所属する親の会にて募集依頼を行い、研究参加者募集のチラシの配布を通して参加の意思を示した者とした。3名の参加者より同意が得られた。参加者の希望する日時・面接時間の調整を行い、2020年2月から3月にかけて半構造化面接を行った。面接内容は、医療・教育・福祉サービス利用経験時の肯定体験および怒りや傷つきの体験について思い浮かぶことを自由に回答してもらうこととした。面接内容は、許可を得た後に音声で録音し、母親から聞いた話の内容をメモに記した。調査対象者を、既に成人している ASD 者の親とした理由として、ライフステージを超えて、多様な関係機関を活用する ASD 者の親として関係支援者との経験を検討することで、求められる支援者の姿勢が検討できるのではないかと考えたためである。

実施場所は、インタビュー内容が他者に聞き取ら

れることの無いよう、個室とした。所要時間は、各参加者とも1時間程度であった。インタビューについては、支援者との関りについての体験を問う半構造化面接とした。研究参加者に対し、①医療機関利用時における専門職との関わりの中での肯定的体験について、怒りや傷つきを感じた体験について、②わが子の教育機関在籍時における教員との関わりの中での肯定的体験について、怒りや傷つきを感じた体験について、③福祉サービス利用時の支援者との関わりの中での肯定的体験について、怒りや傷つきを感じた体験について、インタビューより尋ねる形で進行する半構造化面接とした。インタビュー中は、研究参加者の反応に応じ、話題を先の質問項目に戻るなど柔軟に実施した。また、インタビュー実施においては倫理的配慮の観点から、インタビュー実施者以外に1名同席した。同席者は、研究参加者に対する倫理事項の順守についての確認および記録者として同席した。

### 2.3 データ分析

音声データをパソコン上でwordにて逐語録を作成した。まず、研究者2名でデータを繰り返し読み、内容を把握したうえで、エピソードごとに怒りや傷つき体験を生じた状況、専門職の関わり、親の気持ち、親の専門職への対処、親の専門職への期待の視点から語りを分類し表にまとめた。その後、親が挙げたエピソードにおいて、状況、支援者の関りと、親の気持ち、対処、期待が互いにどのように影響するのかについて検討を行った。本稿においては、怒りや傷つき体験について報告する。

### 2.4 倫理的配慮

本研究は、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：19-096）。研究参加者に対して、口頭および書面で、研究目的、概要、匿名性、機密性、研究参加の自由、研究参加の利益・不利益、不参加であっても不利益を被らないこと、同意撤回できること、録音データ及び逐語録データの取り扱いや管理方法、研究終了後の破棄方法を説

明し同意を得た。また、個人が特定されない形での学会発表や学術論文での公表についても同意を得た。

## 3. 結果

### 3.1 研究参加者の概要

研究参加者は、ASD児の母親3名であった。研究協力の得られた3名の親に対し、医療・教育・福祉サービス利用時の支援者との関係における怒りや傷つき体験および肯定体験についてインタビューを実施した。本稿では、研究参加者のうち、目的とする内容に関する的確な語りの得られた2名のインタビュー結果についてまとめた。以下、本稿で報告する2名について記述する。Aの子は、地域の特別支援学級に在籍後、特別支援学校高等部へ在籍し、現在は生活介護事業所を利用している。Bの子は、ASD、知的障害、難聴を伴う。特別支援学校在籍を経て、自立訓練事業所、就労継続支援事業所の利用後、在宅となっている（表1）。

### 3.2 語られた怒りや傷つき体験からみる親の支援者への期待

子の特別支援学校在籍時の怒りや傷つき体験における状況、教員の関わり、親の気持ち、親の対処、親の教員への期待について表2に示した（表2）。研究参加者AおよびB共に、教員とのやりとりにおける怒りや傷つきを感じていた。表2のAの語りにみられる「本人のわかるように対応してほしい」という期待に対して、担任から「お母さん、ちゃんと伝えていませんか」と問われ、Aは「この子の気持ちに目が向いていないと思ったかな」と述べたように、親の支援者への期待と教員の親への言葉がけの内容に対するズレを親が感じたエピソードが怒りや傷つき体験がとして語られていた。子の高等部および卒業後の福祉サービス利用時の怒りや傷つき体験における状況、支援者の関り、親の気持ち、親の対処、親の支援者への期待について表3に示した（表3）。福祉サービス利用時においても支援者に対し、AおよびB共に怒りや傷つきを感じていた。特別支援

表1 研究参加者2名の属性と子どもの属性

	対象A	対象B
属性	48歳 パート勤務	53歳 NPO法人パート勤務
子どもの属性	21歳 女性 知的障害を伴う自閉症	22歳 男性 知的障害を伴う自閉症、難聴

表2 子の学校在籍時の怒りや傷つき体験

研究参加者	A	A	B
状況	学校で問題が起きたとき（他の子との関わりのトラブルが起きた際）	授業中の子どものふるまいについて教員とのやりとりの際	進路選択（支援学校へ行くか迷っていた時）
教員の関わり	お子さんにちゃんと伝えていきますかと聞かれた	学校で、お子さんが静かにしてくれてくれたから、みんなが落ち着いていたと言われて。	聾学校の先生には、専門の支援が受けられるところに行った方がいいんじゃないかって言われた。支援学校には、難聴があるからその支援を受けられるところに行けばって言われて。
親の気持ち	この子の気持ちに目が向いていないんだなと思ったかな。担任に言ってもだめなのかなって思った。	ああ、ダメだなって。私の育て方を否定されるような気持ちかな。残念な。	「腹立ったのとどうすればいいのって思った。」「担任の先生は良くしてくれたけど、聾学校は耳の悪い子がくるところで知的障害がある子がいくところじゃないっていうのがあったのかなと思う」「すぐ傷ついた」
親の対処	問題をわが子のせいにしたときは、教頭に話したけど。	わざわざ言わないことも多いかな。関係がわるくなるし、言っても駄目だから。	感情的になって、どうしたらいいんですかって聞いた
親の教員への期待	自閉症の子は一人ひとり違うんだから、本人のわかるように対応してほしいかなって思ってた。	学校の先生って、子どもに合わせて教えるはずなのに、結局みんなと同じようにできないとだめなのかっていう。	「本人のために、一緒にやろうという言葉が欲しかった。」「知的障害、難聴以上に自閉症的な部分への対応が重要だと思った。そこをわかってほしい」

学校卒業後の福祉サービス利用時の怒りや傷つき体験の中では、Bの語りに見られるように「ここでもそれを言われるんだ」といった繰り返し体験が語られていた。また、その際の親の対処として「わざわざ言わない」といったように、親の思いや期待について話していないこともうかがわれた。

怒りや傷つき体験として取り上げられたエピソードは、ASD者であれば困難を示しやすい事柄に対するものが多かった。表2に示した「状況」の欄にあるように、集団における子どものふるまいの困難さや、表3の感情コントロールの困難さ、コミュニケーションの困難さといった点に関するものである。このような状況で、親は「本人にわかるように対応してほしい」や「もっと理解があると思っていた」という我が子の行動への理解に基づく支援を期待している様子がうかがえる。さらに、卒業後の福祉サービス利用時には、「ここでも言われるのか」といった怒りや傷つき体験を繰り返して感じることがうかがわれた。

AやBが怒りや傷つき体験として語る背景には、「学校の先生って、子どもに合わせて教えるはずなのに、結局みんなと同じようにできないとだめなのかっていう」といった発言や、「本人のために、一緒にやろうという言葉が欲しかった」といった発言のようにわが子を理解してほしい、一緒に考えてほしいという教員や支援者への親の期待があり、「お子さんにちゃんと伝えていきますか」や「専門の支援が受けられるところに行った方がいいんじゃないか」といった支援者の発言が、親にとって期待と異なる対応に感じ、親にとって怒りや傷つき体験として語られていることが推察された。

このように、親が怒りや傷つき体験と感じた背景には、以下のような共通点が挙げられると考えられる。①怒りや傷つき体験の前場面として「我が子が適切な行動を取ることができずにいる状況を共有する」プロセスがあった点、②支援者と親がその出来事について共に話し合う場面で、親と支援者間における子どもの行動背景の捉えの違いを感じている

表3 子の高等部及び卒業後に利用した福祉サービス利用時の怒りや傷つき体験

研究参加者	A	A	B	B
状況	職場で本人が我慢できなくて怒ってしまったとき	事業所で他の利用者に対し一方的に関わることで、イライラする姿について報告をされた際	職場実習の際	グループホームの体験利用の際、本人の表情が悪かった。(不穏な様子)
支援者の関わり	お母さん教えてくださいか、ちゃんと怒っていますか、と言われた	人の気持ちをわかって行動するようにとか、できないことを、やらせるようなことがあって。	(本人が) みんなとのコミュニケーションがとれるのか不安、その支援ができるかどうかで言われて。	
親の気持ち	この子のことをわかる人はいないのかなという。うーん、もう、がっかりしたというか。	誰もわかってくれなくて、この子がかわいそうなの。ここ(の事業所)はダメかなって思ったかな。	ここでもそれを言われるんだって思った。重複障害って難しいなって思った。あきらめたっていうか。	この子にとってすごく大切なタイミングなのになと思った
親の対処	特に言っていないかな。	わざわざ言わない	最後の実習はもういいですって言ったんです。	上司の人には、電話をしてほしかったって言いましたが、まあ、その先は内部のことだから、それだけで…
親の支援者への期待		福祉の人は、もっと理解していると思っていましたから。	他の人とうまくいくかどうかを、相手が気にしたことだと思ったんだと思う。でも、難聴はどうにもできないのに、そこでの支援を考えてやるっていうのじゃないんだって…	情報共有してほしかった。お母さんに電話して確認してみようかって言ってほしかった。

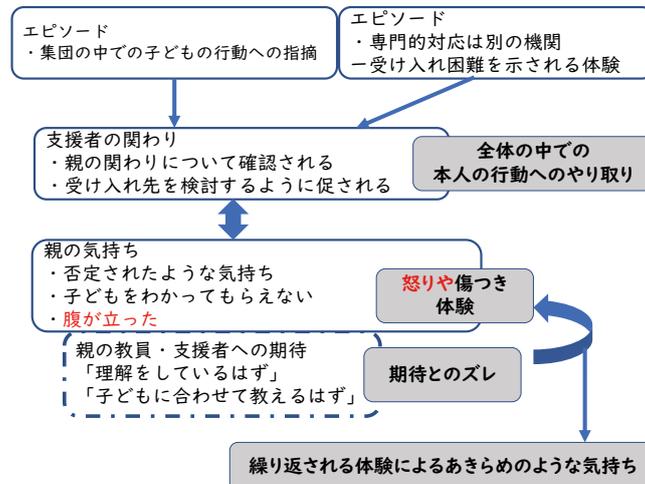


図1 親の支援者に対する怒りや傷つき体験

点、③支援者にはこうあってほしいという期待を親が持っており、支援者の言動が期待と異なる点が挙げられた。上記のような親と支援者間の違いは、子どもの困難場面について共有し、出来事の課題解決へ向けて話し合う場面であるにも関わらず、親に怒りや傷つきをもたらす怒りや傷つき体験として取り上げられていた。さらに、学齢期、成人期とライフステージを越えて同様の体験をしており、繰り返される視点の違いは、親が支援者に期待することを諦めるという表現につながっていた。上記について図1に示した。(図1)親が、教員や支援者とのやりとりにおいて、子どもの行動について「親は」子どもにどのように関わっているのかについて確認されることにより傷つきを感じていること、受け入れについて教員・支援者の立場のみを示されることによる「一緒に」考えてもらっていないという思いにつながっていることもうかがわれた。このことは、困難場面の解決へ向けて、親と支援者が同じ方向を向いて進むためにも、支援者自身が親の視点や思いに目を向けることの重要性を示しているといえる。

#### 4. 考察

以上より、家族支援における親と支援者の関係構築の重要を軸に考察する。今回の参加者が怒りや傷つき体験として各エピソードとして挙げた背景に、支援者への期待と支援者の実際の言動とのズレを感じていることが共通点としてあげられる。さらにその怒りや傷つき体験がライフステージを超えて繰り返されることにより、「誰もわかってくれない」や「あきらめる」という発言に至っていた。野田によると、支援者からの家族が抱える思いへの受容・共感については、調査に協力した支援者の中の44.6%にとどまっていたことが報告されている<sup>12)</sup>。また、宋らは、就学期の親へのニーズ調査を実施し、半数以上の親が校内での連携および専門機関からの学校への助言・指導を望んでいることを報告している<sup>13)</sup>。これらの報告は、親が学校との連携に困難さを感じ

ていることが示唆され、この背景には、教師の無理解に対する不満や他の親との関係における迷いやストレスを指摘している<sup>13)</sup>。山本らは、子どもの発達段階ごとに保護者の不安や悩みの変化や種類の増加を指摘している<sup>14)</sup>。そのような多様な状況を踏まえながら連続した支援の実現が求められるなら、情報の共有とともに一貫した支援者の姿勢も求められるといえる。特に今回のように親が「あきらめた」といった発言に至ることなく共に支援の方向性を同じくするためには、親自身がわが子をどのようにとらえているかといった親自身への理解を欠くことができないといえる。

#### 5. まとめ

本稿においては、既に成人している知的障害を伴うASD者の母親を対象に、インタビュー調査を実施し、教育・福祉機関をわが子が活用する中で、支援者との関係における親の怒りや傷つき体験について抽出した。インタビュー調査より、研究参加者2名ともに、教員および支援者とのやりとりの中で怒りや傷つき体験のエピソードが語られた。母親が怒りや傷つき体験として感じる背景に、社会的に問題の生じた場面などにおいて、支援者ならわかっているはず、一緒に考えてくれるはずといった親の期待に対して、支援者からは家庭での親の対応を確認されるといった内容のズレが要因の一つであると推察された。また、それらの葛藤は、学齢期のみならず卒業後の福祉サービス利用時にも感じていることが確認され、支援者と親の関係性構築の重要性が示唆された。今回は2名のみでの報告であり、推察の域をでないが今後対象者を増やし、支援者に求められる姿勢について考察を深めたいと考える。また、本稿は怒りや傷つき体験についてのみの考察に留まったが、肯定的体験についての分析を進めることで、支援者の言動が与える影響についてさらに多面的な検討が行えるものとする。今後は、この点についても分析を進めたい。

#### 謝 辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の方々に、心より感謝申し上げます。なお本研究は、生存科学研究所自主研究助成(承認番号201901)を受けて実施した研究の一部である。開示すべき利益相反はない。

#### 文 献

- 1) 橋本龍一郎:脳画像からみた自閉スペクトラム症の脳機能ネットワーク。高次脳機能研究, 36(2), 219-224, 2016.
- 2) 日本精神神経学会監修:DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院, 東京, 2014。(the Americans with Disabilities Act 作成 監修日本精神神経学会)
- 3) World Health Organization: ICD-11. <https://icd.who.int/en>, [2014]. (2021.5.20確認)
- 4) 文部科学省:平成24年12月通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒

- に関する調査結果について. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm), [2012]. (2021.5.20確認)
- 5) Centers for Disease Control and Prevention : Data & Statistics on Autism Spectrum Disorder. <https://www.cdc.gov/ncbddd/autism/data.html>, [2017]. (2021.5.20確認)
  - 6) 米倉裕希子, 三野善央: 障害のある子どもの家族支援—児童デイサービスを利用している家族のEEとQOL—. 近畿福祉大学紀要, 7(2), 141-149, 2006.
  - 7) 鶴野隆治: 「家族の暮らし」と「家族からの自立」の支援—知的障害児者家族福祉の視点—. 介護福祉学, 7(1), 70-77, 2000.
  - 8) 仁尾かおり, 文字智子, 藤原千恵子: 思春期・青年期にあるダウン症をもつ人の自立に関する親の認識の構造. 日本小児看護学会誌, 19(1), 8-16, 2010.
  - 9) 八重樫大周, 奥野雅子: 発達障害を抱える家族への支援プロセスに関する一考察. 現代行動科学会誌, 32, 20-30, 2016.
  - 10) 小池伸一, 古川宏, 大西満: 障がいをもつ子どもの母親—心理状態とその要因—. 作業療法, 26(1), 11-21, 2007.
  - 11) 佐藤美由紀, 清水直治, 加藤正仁: 障害幼児をもつ家族に対する通園施設の役割—就学相談の在り方について—. 発達障害研究, 30(3), 200-211, 2008.
  - 12) 野田香織: 広汎性発達障害児の家族支援—専門家の支援内容に関する調査研究—. 臨床心理学, 10, 63-75, 2010.
  - 13) 宋慧珍, 伊藤良子, 渡邊裕子: 高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと親の支援ニーズに関する調査研究. 東京学芸大学紀要第一部門教育科学, 55, 325-333, 2004.
  - 14) 山本理絵, 工藤英美, 神田直子: 発達障害をもつ子どもの乳幼児期から思春期までの縦断的変化—母親の子育て困難・不安・支援ニーズを中心に—. 人間発達学研究, 6, 99-100, 2015.

(2021年5月31日受理)

## Mothers' Struggle with Professional Supporters in their ASD Child Rearing Experiences -From the Analysis of a Preliminary Survey

Sanae ODAGIRI, Yumiko KITAGAWA and Hiroko YOSHIDA

(Accepted May 31, 2021)

Key words : Autism Spectrum Disorder, parents, experience of feeling angry or hurt

### Abstract

The purpose of this study was to analyze the narratives of mothers of ASD patients with intellectual disabilities who have already reached adulthood about their experiences of feeling angry or hurt through their interactions with supporters, and to examine the words and actions of supporters and the perceptions of parents. According to the results of the interview survey, two out of the three study participants talked about episodes of experiences of feeling angry or hurt in their interactions with teachers at special-needs schools and supporters at welfare services. In addition, the same experiences occurred across the life stages, and the repeated experiences of feelings angry or hurt led to the expression of parents giving up on their expectations of supporters. This indicates the importance for the supporters themselves to pay attention to the parents' viewpoints and thoughts in order for the parents and the supporters to move in the same direction toward the resolution of difficult situations.

Correspondence to : Sanae ODAGIRI

Department of Social Work  
Faculty of Health and Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan  
E-mail : [sawada.s@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:sawada.s@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.31, No.1, 2021 205-211)